

私は今回の弘前行きで、もう一つの楽しみ「津軽のキリシタンについてお話を聞く」を予定していました。その願いが叶いました。

廿六日、松平筑前守利光使札到來、高山右近口口坊也内藤飛騨守口口依爲二伴天連宗旨一、捕之遣于京都板倉伊賀守、其外宗旨替者不替者、記録而獻之、本多佐渡守、同上野介言上、仰曰、日本國中伴天連宗旨不替者、急可流遣津軽云々、兩人奉之、即回觸狀云々、

キリシタンについて様々な資料をネットで見ていると、1614年高山右近がマニラに流刑となったと同時にキリシタンが津軽に流刑となった記録が「当代記」[国立国会図書館デジタルコレクション「当代記」](#)にあることを知りました。

津軽の初代藩主為信が1596年次男信枚に、1607年長男信建にキリスト教の洗礼を受けさせたという記録が16~7世紀のポルトガルのイエズス会の記録にあるとのことですが、弘前藩の資料にはありません。豊臣秀吉が伴天連追放令を1587年に発布、1597年に26聖人処刑、徳川家康が禁教令を1613年に発布していますから、キリスト教が日本では許されない状況になってからの出来事です。利を見ることに長けた為信公が禁教下にキリスト教に接近したことは不思議でした。その後すぐに辺境・津軽がキリシタンの流刑地・シベリアとなり、殉教の場となったことも、私は全く知りませんでした。

お話し下さったのは、作曲家、また、津軽の土着の音楽や、民族音楽の研究者、「地域学」の研究者である笹森建英先生です。先生の父上は東奥義塾の塾長でしたが、戦時下に、敵性宗教と見なされたキリスト教主義学校の私たちの母校を理事長として守り、後に青山学院院長、国会議員として働かれた笹森順造氏です。私たちにとっては笹森順造はレジェンドです。そのご子息にお会いできただけでも嬉しいことですが、ご親切にも預かりました。

建英先生が津軽キリシタンの研究をなさっておられるとお聞きしていたので、先生の御妹さんが母校の教師だったという「つて」で、図々しくもお願いをしたのです。先生ご夫妻は私たちをご自宅に招いて、歓待して下さいました。先生は「津軽にキリシタンの遺跡、文献記録など、なにもない」ということを話すだけだとおっしゃりながら、様々な文献や研究書に当たって、10頁にも及び要約資料のプリントを作って、お話しくださいました。

誰が、どこに住み、どのような信仰を守ったか、という記録は不明です。断片的に殉教の記録が残っているのみです。流刑後、司祭たちが慰問のために、津軽や蝦夷に、何度か密かに潜入した記録もあります。津軽に流刑されたのは71人でしたが、記録によれば、なんと合計89人が斬首、火刑で殉教しました。キリスト教は1549年のザビエル来日以来、50年間で、広範囲に多数の信者が生まれています。なぜ為信公がキリスト教に接近したのかも謎のままです。2代目藩主の信枚は洗礼を受けていましたが、弾圧に回りました。幕府の意向に従ったことは事実でしょう。津軽ではこれらの事実は常識であると先生はおっしゃいましたが、私は恥ずかしながら知りませんでした。隠れキリシタンとしても、サブカルチャーとしても、キリスト教の痕跡を津軽では見つけることができません。地名などに推測されうるものもありますが、確証は得られません。それだけ徹底的に弾圧されたのです。様々な研究も推論、仮説にならざるを得ないとのこと。海老澤有道の研究書が良いのでは、と勧められました。津軽は悲しみの流刑地です。それをただ記録とするのではなく、殉教者の苦難を、記憶に重く留めるべきだと私は思いました。

客観的資料がないだけに想像の余地があり、フィクションが生まれます。最近津島佑子の遺作「ジャッカ・ドフニ」を読みましたが、まさに津軽と蝦夷のキリシタンの悲劇の叙事詩のような作品でした。おいしい夕食をごちそうになり、その後、先生ご夫妻がドボルザークの舞曲をピアノ連弾されました。なんてロマンチック！先生は若々しく情熱的で、真摯な研究者でした。感謝です。